風の末裔シリーズ・４th シーズンの１

～海に降る雪～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

灰色の海と灰色の空が、彼方まで境目なく続く。狭い湾だが、こんな霧の中だと、無限な空間に感じられる。
このまま砂を歩いて行ったら、この世の果てまで行き着く事が出来るのかしら…？

木枯らしの中、波打ち際を歩く子供は裸足だった。肩からずり落ちそうな着衣をはためかせながら、打ち上げられた流木を、拾い拾い歩いている。
「…？？」
風の気配が変わった。海から一直線に吹き抜けていたのが、何処かで何かにぶつかって捩(よじ)れている。その捩れは移動して、上空から段々に近付いて来る。
「ハァーア――!!」
子供は白い息と共に驚嘆の声を発した。灰色の空から影を落として降りて来たのは、濃緑の草の馬だった。

子供から少し離れた砂浜に降り立ったその馬の背には、部厚いマントを深く被った男性が乗っていた。群青色の長い髪が一筋、フードからこぼれて風に弄(もてあそ)ばれている。
「や…あ……」
口から音が発せられた。なんだかとても、震えた音。

「君……シンリィ…？」
子供は跳び上がった。流木を放り投げ、水色の細い髪を翻して逃げ出した。
「待って!!」
背後からまた音が聞こえる。コワイ…！　コワイ…！

砂浜の端っこ、低い灌木の林の中に、小さな杣屋がある。存在その物を否定されているような、朽ちかけた密やかな住処。板壁に流木が重ねて立て掛けられ、茅で編んだ戸口は風に煽(あお)られている。
戸口に立つヒトが居る。
あのヒトの処へ戻れば安心だ、何からも護って貰える！
子供は浜と林の間の浜昼顔の群落を駆け抜けて、そのヒトの懐に飛び込んだ。
彼は黙って、息を弾ませる子供の肩を抱いて、骨張った指で頭を撫でる。潮に焼けた白い髪が子供の頬に触れた。安心出来る匂い。
懐に顔を埋める子供を、柔らかい羽根が覆った。一枚一枚が野放図に広がった、薄い緋色(ひいろ)の羽根。子供は限りない安堵の中で、目を閉じる。

「……」

有翼のそのヒトは、子供を抱きながら、彼方を見据えている。

さっきの騎馬が、ゆっくり浜を歩いて来ていた。

羽根は隠れるように細くたたまれ、白い髪のヒトは黙って子供を小屋の中へ押しやった。

子供は素直にされるままに従う。このヒトに逆らう事も、見知らぬヒトに好奇心を抱く事も、この子供には有り得ない事だった。

「お久し振りです」

フードのヒトは下馬して話し掛けたが、白い髪のヒトは無言だった。風になびられる錆びたような髪も皮膚も生気を感じられず、着衣から突き出た手足は枯れ松の枝みたいだ。

これが本当に、あのヒト…なのか？

「シンリィ…大きくなりましたね。…それに、そっくりで…」

フードのヒトは言葉を選びながら歩み寄り、浜昼顔の中へ足を踏み入れかけた。

「そこで止まれ！」

白い髪のヒトは鋭く言った。抑えられていたが強い声だった。

「…何か、用か？」

色があるか無いかの薄い水色の目が、招かれざる訪問者を見据える。

フードのヒトは次の言葉を出すのを躊躇(ためら)って、何回も唾を呑み込んでから、短く聞いた。

「ユーフィは？」

水色の目に、細いが鋭い光が走る。

「…何故、生きていると、思う？」

フードのヒトは電気で撃たれたように顔を上げた。フードが肩に落ちて、驚愕の表情が露(あらわ)になった。整った顔立ちの蒼の妖精。濃い縁取りの目は大きく見開かれ、血の気の引いた唇が小刻みに震えている。

「シンリィが…生きているなら、もしかして…、もしかしてって思ったんです」

白い髪のヒトはその顔を見て一瞬目を緩めたが、すぐにまた無表情に戻った。

「とおに、諦めていると、思っていた」

「カワセミ長…」

「ボクはとおに長じゃない。じき、キミが長だろう？　ナナ…、ナーガ・ラクシャ」

ナーガは幼い頃の名前を呼ばれて、胸を焦がした。

ナナという名前だった頃、こんな最果てで、このヒトとこんな風に対峙するなんて、想像出来ただろうか？

「ユーフィの…墓に参らせて貰えますか?」
「墓は、無い」
「無い?　無いって?」
「自分を焼いた灰は、海に撒いてくれと言った。墓になりたくなかったんだ、ユユは…」
妹の懐かしい名前。兄はまた胸が締め付けられた。
このヒトは、妹が大人の名前を授かっても、つい幼名で呼んでしまっていた。輝く月(ユーフィ)のような妹は、水色の妖精の側でそう呼ばれて、いつも幸せそうだった。

＊＊＊

「用事はそれだけか?」
無表情な妖精の声で、心を呼び戻された。
「いえ」
これからが本題だ。このヒト相手に話を通せるか…だが。
「里へ戻って下さい。シンリィ・ファと共に。彼は、蒼の里の就学年です」
カワセミは無表情が崩れた。目を見開いて口を半開きにした。
「今更何を…と、呆れられるのは分かっています。でも、そういうのは横へやって、今はシンリィの事を、考えませんか?」
「……」
「貴方だっていろいろ教えられるでしょうが、こんな辺境の海辺で二人きりで育つのが、あの子の為になるとは思えません」
「長の血筋が欲しいか」
カワセミの半開きの口が冷ややかな声を出した。
「そんな…!!」
今度はナーガが頬をはたかれたような顔をした。
「・・・少し離れませんか?」
ナーガは小屋の中を気にした。粗末な板壁と茅の戸口は、何の遮(さえぎ)りにもならない。
「気遣い無用」
「でも、あの子にあまり聞かせるべきではないと…」
「気遣い無用と言っている」
「でも…」
「シンリィには言葉を教えていない」
「えっ?!」
ナーガは目を見開いて止まった。その顔から視線をそらさず、カワセミは冷ややかに続ける。
「この世の言葉はあの子を傷付ける事しかしない。だから教えない」
「だ、だけど…」
「誰が、どんな会話をして、うっかりそれを耳にするような事があっても、シンリィは傷付かない。そういう風に育てた」

そう話す白い髪の下の唇は、あくまで淡々と無表情だった。
ナーガは身体中から力が抜けた。膝を折って、それから項垂(うなだ)れて、手を砂の地面に付いた。浜昼顔の葉に涙がぱたぱたと落ちる。カワセミは静かにそれを見ていた。
「す…みません…。ごめんなさい…。そうだ…一番に謝らなきゃならなかったのに……」
少し沈黙があった。
「シンリィの為と言うのなら」
沈黙はカワセミが破った。
「忘れてくれないか。キミ達はキミ達で、忘れて…、前を向いて生きていてくれないか?」
ナーガは顔を上げた。
「僕は!! 確かに、長として里の為にシンリィを連れに来ました! だけれど…!!」
涙を拭いながら立ち上がる。
「ただ、シンリィに逢いたかった。あの子が生きていると知って、いても立ってもいられなかった」
「そうだな…。ボクの結界を破ったもんな」
カワセミの無色だった声に、少しだけ色が付いた。
高い崖に囲まれたこの湾には、ずっと深い霧が立ち込めていて、人間はもとより人外をも拒絶していた。
ナーガは堰が切れたように続ける。
「シンリィ…! 本当なら、同い年の友達と草原を駆け回っている筈のあの子が、こんな木枯らしの砂の上で、言葉も知らずに!」
その頬をまた涙が伝った。
「里へ戻って下さい!!」
「…無理だ…」
カワセミは睫毛を伏せて呟いた。
「無理じゃないです!」
ナーガは逆らった。
「シンリィは生まれて七年も生きています。貴方の力で悪魔は追い出せたって事です。僕が里の民に向けて大丈夫と宣言します。次期長の僕が!」
きっぱり言うナーガに、カワセミは目を細めたが、ただ静かに無言を貫いていた。
それでナーガは少しイラついた。
「シンリィは、貴方の『モノ』じゃない。あの子にだって、色んな権利があるんです!」
「……」

カワセミは黙って踵を返して、小屋の御簾をくぐって、七つにしては小さ過ぎる子供の手を引いて出て来た。子供はちょっとビクついたが、カワセミが両肩に手を置いたので、すぐ安心の表情になった。

不意にカワセミは子供の衣服を開けて、胸を曝(さらし)した。

ナーガは息が止まった。

カワセミが抑えた声で呟く。

「悪魔は、去っていない。ずっとここに居るんだ」

キョトンとするシンリィの胸から下、小さな身体は、黒い斑点に覆われていた。

「ボクの羽根と引き換えに、シンリィは命を取り止めた。だけれど、悪魔を引き離す事までは出来なかった。この子の側に居られるのは、ユユの羽根に護られているボクだけ」

ナーガは思わず後ずさりしそうになって、踏み留まった。しかしその気配を見逃すカワセミではなかった。

「分かっただろ。キミでさえ躊躇(ちゅうちょ)する。当然だ」

言葉の出ないナーガに、カワセミはほんの少し情のこもった声で言った。

「この子はボクが育てる。生涯、平穏な安堵だけに包んで。この子に権利が有るとすれば、誰からも何からも傷付けられない権利だ」

何も言えない。どうしようもない…。ナーガは凍りついた表情で肩を落とした。

「分かっていると思うが、里へは直に帰るなよ。何処か生き物の居ない場所で、時間をおいて様子を見るんだ。悪魔に憑かれていないか」

「……はい」

ナーガはやっと答えた。

「キミの事を、こんな風に心配したくはない。だから、もう来るな」

白い前髪を目に掛けて、カワセミはそっぽを向いた。

「シンリィを、忘れないでいてくれた事だけは感謝する…」

後ずさりしながらナーガはもう一度子供を見た。

父親であるカワセミも子供の頃そうであったろう、限りなく白に近い水色の細い髪。はなだ色の大きな瞳は、妹の幼い頃に切ないくらいそっくりだ。だけれど近付く事も出来ないこの甥っ子に、ナーガは辛うじて微笑みかけた。

シンリィはキョトンとしている。言葉だけでなく、コミュニケーションも教えていないのだろう。

この子がこんな風に育つなんて、誰が望んだっていうんだ

……。

＊＊＊

七年前。

遥か西の国から、モンゴルの草原に、黒い悪魔が忍び寄った。人間の侵略ではない。今度は防ぎ切れなかった災厄の歪み。いや、歪みを直す為の災厄か？　今となってはどちらでもいい…。

黒い悪魔は黒い斑点と共に、人間を根絶やしにせんばかりの勢いで、瞬（またたく）く間に広がった。弱体化していたモンゴル帝国は、これでとどめを刺された。

人間界の災禍は、人外界にも必ず影響する。

悪魔は人外だろうと容赦なかった。

妖精が感染するのは、ウイルスからではない。哀しみと絶望の気配がヒトからヒトへ…、その者の良い悪い、強い弱いに関係なく伝播（でんぱ）するのだ。取り憑かれたら人間と同じ症状を呈し、どうする暇もなく命を落とす。

そうして悪魔は僅かな隙を突いては黒い刻印と共に忍び寄り、無防備な妖精の部族が幾つか壊滅した。

蒼の里では結界を何重にも張って悪魔の侵入を阻止しようとした。しかし…、思いも寄らぬ隙間から、影は滑り込んだのだ。

本当に、思いも寄らぬ隙間から…。

悪魔の侵攻が明らかになった時期、長の一人であるカワセミは、深山に居て情報が遅れ、里へ戻り損ねていた。

里は一刻も早く外部からの進入経路を塞がねばならなかった。身体の弱いカワセミが悪魔に取り憑かれたらひとたまりもない。通信用の鷹すら使えないこの事態に慌てる執務室に、彼の妻のユーフィが、翡翠の石板を抱えて入って来た。

〈――ボクは大丈夫――〉

目を閉じて左手にピンクの石を握り、右手の蝋石で、皆の前で石板にそんな文字を書いた。遠くから送られて来るカワセミの意志は、そうやって妻を通して皆に伝えられた。

カワセミは冷静だった。何となく確信があった。思った通り、彼は悪魔の支配する大地の真っ只中に居ても、一切感染しなかった。背中の羽根はそういった物からも、主を護る力を持っていたのだ。

そして、更に冷静に、〈自分は悪魔が去るまで里へは戻らない、弱い部族が悪魔の支配に抵抗出来るよう、尽力して回る〉、と宣言をした。

蒼の一族の長らしい鮮やかな決断。大長がいたら涙ぐんだだろうが、彼も西風の里で足止めを食っていた。

里からカワセミへの返信は、やはりユーフィが石を握りながら文字を書く。それが消えたら『伝わった』合図。文字は書い

た先から消える事もあれば、翌日消えている事もあった。
執務室の皆は、ただただ文章でカワセミを励ますしか出来ないのが歯痒かったが、それすら度々は躊躇(ためら)われた。
石の通信はユーフィの体力を消耗させたからだ。
彼女は身重だった。一緒になって長らくの時を経て、やっと授かった子供。夫不在のまま、心細い臨月を迎えていた。

そして……あの朝、眠れない男性陣の耳に響いたのは、元気な産声ではなく、産婆と女性達の金切声だった。
「あ、悪魔がぁ――!!」
生まれたばかりの赤子の全身に悪魔の斑点があるというのだ。
「外と交信する事で、悪魔を呼び入れてしまったのよ!!」
パニックに陥る助産師達を落ち着かせて身を浄めさせ、隔離するのに人手を割いて、母親と赤子に対する注意が遅れた。
一瞬の遅れを後悔する間もなく、産屋はもぬけの殻だった。産褥の中、動けるとは誰も思っていなかった。仲間の何人かが禁を破って里を飛び出したが、母子は発見出来なかった。
数日後、執務室の翡翠の石板に、独りでに文字が浮き出していた。
カワセミからの短い手紙。何の説明もなく、皆への別れの言葉だけが、あっけなく綴られていた。

仲間の何人かは探しに行こうとした。が、当時のツバクロ長が止めた。黒死病の悪魔は明らかに里に狙いを付けている。これ以上風を通す訳には行かない。
――苦渋の決断……。
ツバクロにしても、愛娘と、親友と、大切な孫なのだ。
それきり、誰もカワセミにもユーフィにも会えていなかった。

ユーフィの石板に入れ替わり立ち替わり手紙を書いてみたが、それが消えている事はなかった。
カワセミは本当にきれいさっぱり皆の前から消えてしまった。
・・思うところ、あったのだろう。
カワセミは如何なる時も忠実に、里の長で在り続けたのに、里は彼の妻と子供を護らなかった。
ユーフィが逃げ出さなかったら、パニックに陥った皆が、どう行動したか。想像したくもないが、少なくとも、子供の命は保障されなかったろう。そんな事を誰もが考えて、誰もが口にしなかった。
蒼の里は、じっと耐えるしかなかった。
黒い悪魔が草原を蹂躙し尽くし、やっと下火になった時には、二年の歳月が流れていた。草原の様相は大きく変わり、かつての生命溢れる豊穣の地は窶(やつ)れ荒れ果て、多くの大切なモ

ノが失われていた。
外へ出られるようになり、皆は一番にカワセミ達の行方を探した。消息を絶つ直前に滞在していた山の民の部落までは簡単に割り出せた。そして、疲れ果てた生き残りの話を聞いて、また胸を潰す事となる。

ユーフィはピンクの石を頼りに、カワセミに辿り着けていた。しかしその時は…もう、彼女も悪魔の手の内で、子供は虫の息だった。
カワセミは母親に懇願されて…羽根を散らせて、赤子を救った。でも妻に対しては…、何にも何にも…何にも出来なかった。
そうして、悪魔に憑かれた妻を抱えて、この部落からも身を引いた。村人がうつむいて教えてくれたのは、そこまでだった。身を引いた…という言い方をしたが、現実がどうだったのかは…ワカラナイ……。
その後、ユーフィは、この悪魔を宿したままの赤子の側にいられるよう、命を搾(しぼ)ってカワセミに新たな羽根を与え、海の灰となったんだろう……。
村人は最後にうつむいたまま教えてくれた。
子供は父母二人で名を授けていたと。小さな額に二人の手を重ねて…、シンリィ・ファ(金鈴花)と名付けていたと。

＊＊＊

里より遥か北東の、海辺の二人を見つけたのは、殆どその為だけに必死で修行を積んだ、ナーガの内なる目だった。

世界から忘れ去られた小さな湾で、カワセミはユユの羽根と共に、シンリィを包み込むように生きていた。

里への高空気流の中で、ナーガは涙を凍らせながら叫ぶ。

「あの子一人救えなくて、何のための兄だ!!　長だ…!!」

里の馬繋ぎ場に降り立つ。

ここから見上げる里の風景も。短い間にすっかり変わり果てていた。住居のパオの数が減り、所々地面に焼け焦げた跡がある。黒死病の患者が出た家は、焼いて清めるしかなかった。ナーガが幼い頃育った家も…ない…。

ガランとしたメインストリートを登り、執務室の二重の御簾を開ける。奥の長椅子の人影が起き上った。

「ただいま戻りました、ノスリ長」

「ナーガか?　寝ちまってたようだ。おかえり」

ノスリは相変わらず大きな身体を揺らして、椅子に座り直した。ガタイは大きいが、頬は痩けて、目の下に隈が出来ていた。

「ノスリ長、忙しい時なのに、勝手させて貰ってすみません」

「何、俺は平気だ。それに勝手なもんか。俺だって一刻も早く行って欲しかった。…逢えたか?　奴に」

「逢えました、…一応」

「そうか!　元気にしとったか?」

「……」

「ユーフィは?」

「……」

「…やはり…駄目だったのか?」

「…はい……」

「…子供は?」

「……」

ナーガは何をどう報告してよいものか、言葉が出て来なかった。察したノスリも質問は止めた。

マントを脱いで、長椅子に落ち着いてから、ナーガは海辺の出来事を始めからゆっくり話した。

「…そうか…。悪魔は憑いたまま……」

一通り聞いたノスリも言葉に詰まり、額に手を当てた。

「それで奴は…、全て捨てて、子供の側にいる事だけを選んだのか…」

「ノスリ長…」

「そうだろうな…」

「納得するんですか？」
古くからの親友である彼の方が、カワセミの心が解るのだろうが、しかし…。
「ああ、奴がそう決めたのなら、納得してやる。俺があいつにしてやれる事は、それっくらいしかないんだ、もう…」
不服気なナーガの顔を上目で見てから、ノスリは続けた。
「俺達がユユに…ユーフィに、どんな仕打ちをしちまったか…」
額に当てた手の下で声は絞るようにかすれて行く。
「本来なら、お産が終わって、祝福されて、誉められて、ホッと休めるべき時に…。あの子が不安の中、外から聞こえる喧騒と言葉の数々にどんな思いをしたか…。ナーガ、俺はそれを考えると、消えてしまいたくなる…」
「……」
ノスリが窶(やつ)れているのは、執務室の人数が減ってとんでもなく忙しくなったのと、家族を亡くして気落ちしているせいだけではなかった。
「だから、あのヒトは、言葉を教えないんですか？」
「…ん？」
「言葉はシンリィを傷付けるだけだと」
「…そうかもな」
ノスリは立ち上がって、窓に向いて空を見上げた。
「多分シンリィはずうっと『護られていたい子供』のままだ。時間の止まった閉じられた空間では、言葉は邪魔なだけ。奴さんらしい、極端な答えだ」
「でも…でも…、あれで良い筈がありません」
「何でそう言い切れる？」
「だって、子供ってのは、笑ったり泣いたり、失敗したり誉められたり…、歓びを積み重ねて大きくなるのに、あの子にはそんなの、何にも無いんです」
「…ん…」
ノスリは振り向いた。
「何も無いって事はないだろう。父親の愛を一身に受けている」
「でも…他に、何も…」
「その愛さえ受けられずに育つ子もいる。どちらがより不幸かなんて、他人には分からないだろう？」
「……」
「なあ、ナーガ。肝心なのは、俺たちがその子が不幸だって決めつけて、見下ろしちゃいかん、って事だ。その子はその子で、狭い世界の中で、日々何がしかの幸せに心を膨(ふく)らませて、豊かに生きているのかもしれないだろう？」

海辺で子供が流木を拾っている。
今日は空から草の馬が降りて来ても、前程には驚かなかった。一度見慣れたモノ。自分の信頼するヒトが、追い払わなかったヒト。シンリィの中で、コワクないモノ…に、分類されたんだろう。それでもこの子供にとっては、波打ち際の割れた巻き貝と同じ位、どうでもいい存在だった。
「こ・ん・に・ち・は」
少し離れた所で、ナーガは下馬して話し掛けた。
「僕はナーガ。ナ・ア・ガ・だよ。シンリィ」
子供は流木を抱えたまま不審げに後退りする。
「そう、これを君にあげようと思ったんだ。お・み・や・げ」
ナーガは鞍袋から、小さなフェルトの靴を取り出した。
シンリィは一瞬それを見たが、すぐ横へ駆け出した。そっち方向…、浜と林の間に、いつの間に、カワセミが立っていた。
「来るな…、と言った筈だ」
「裸足の甥っ子に靴をあげるくらい、いいでしょう?」
「この子は…」
カワセミは、しがみ付いて来る子供の頭を撫でながら言った。
「裸足が好きなんだ。ボクが、この子に靴を履かせようとしなかった、とでも思ったか?」
「…いえ…」
ナーガは出過ぎた事に恥じ入って赤くなった。でも、これ位で引き下がっちゃ駄目だ。
自分が弱いからユーフィも見捨ててしまった。今度は絶対引かない…！　諦めない…!!

＊＊＊

「ノスリ長は、貴方の言う通り、シンリィはそっとして置く考えです」
浜を歩く二人と距離を取りながら、ナーガは勝手に喋りながら着いて行った。シンリィは、カワセミにぴったり寄り添っている。
「…ツバクロは?」
カワセミがぽそりと聞いた。つい、会話に乗ってしまった…という感じだ、
「父は…、生きていれば、僕より先に此処へ来たでしょうね…」
後ろ姿のカワセミがピタリと止まった。
「…そうか……」
時間をかけて呑み込んで、カワセミはまた歩き出した。シンリィはカワセミに合わせて止まったり急いだりしている。
「ノスリは…」
珍しくカワセミから喋り出した。

「昔っからボクの言うことは、文句を言いながらも通してくれた。ボクとツバクロはいつもぶつかっていた。でも、悪巧みをするのはいつもツバクロとで、ノスリは振り回され役だった…」
「……」
「…大長は？」
「悪魔が終息した五年前…」
「……」
「西風の里を出てこちらに向かったらしいです」
「……」
「それきり、誰も知りません」
「……」
カワセミは無言になった。聞かなければよかった…という感じだ。
「蒼の里も、結局悪魔の侵入を許しました。ユーフィが里を出てから、二年後。みんな必死で闘ったけれど…、五人に一人、命を落としました。子供がたくさん…」
カワセミは立ち止まって空を仰いだ。ナーガも距離を保って立ち止まった。
「夕まづめだ…」
「え？」
「風が止まる。湾に澱んだ気が溜まる。もう、帰った方がいい」
「はい」
ナーガは素直に従って、馬を引き寄せた。
「また来ます」
「もう来るなと…」
「来ます」
蒼い妖精は群青の髪を翻して、上昇しながら叫んだ。
「シンリィ、またね!!」
執務室はノスリの弟子だった長男を大机に据えて、何とか回っていた。
早い内に草原全体を立て直さねば取り返しがつかなくなるし、力の弱った里を狙う外からの侵入者もある。気は抜けなかった。
生き残った弟子達は一長一短で、オールマイティのナーガに負担が掛かる事が多かったが、ノスリが出来得る限りのフォローをして、彼に時間を作ってくれた。
僅かな時間を割いては、ナーガはジェット気流に乗って、小さな浜辺に足を運んだ。
そうしてある時、ふと気付く。自分が、義務や使命感や、ましてや贖罪で、この浜に来ているのではない事に。

「…しつこいな……」
浜昼顔の浜で、カワセミは振り向いて呟いた。しかし最初の険わしい感じは消えていた。
相変わらず距離は取っていたが、シンリィは『蒼いヒトがそこにいるコト』に慣れて、独りで浜を歩いていた。
「何度来たって、どうしようもないだろう。キミはあの子の為には何も出来ない」
「ええ、出来ません。貴方の為にも」
「なら、何故来る?」
「自分の為です」
「…?」
カワセミは怪訝な顔でナーガを見た。
「僕が寂しいからです。シンリィを見ているだけで寂しいのがおさまります。だから来るんです」
「…??」
カワセミは更に狐に摘まれたような顔になった。ナーガはそんなカワセミに構わず、勝手に喋り続けた。
「一緒にこの世の光を見た妹も、人生の灯台であった父も亡くした。里の大切なヒト達も…。そんな地獄でシンリィは存在していてくれました。あの子は悪魔なんかじゃない。生きていてくれるだけで、僕にとって大きな救いになるんです」
少し間があいた。
「ユユは…」
聞く度に胸がチクンとする名前を、カワセミはまた口にした。
「ユユはボクに何も言わなかった。どんな状況で里を抜けて来たかとか…」
「……」
「ずっと里の事を気にしていた。自分が逃げたことで、皆の心に傷を残してしまったと。ずっと里の皆の心配ばかりしていた」
「……」
「だから、ユユの為に、皆には早く忘れて欲しい、早く傷を癒して欲しい。それが、ユユの喜ぶ事だと…」
「違います」
ナーガの声がガラリと変わって、カワセミは振り向いた。
「妹は、貴方が思っているよりずっと、自己中心でわがままだ。僕には分かります。なんせあの子とは母のお腹にいた時からの付き合いです。どんな時だって折挫けないで、強(したた)かに未来(さき)を見ている。そして、僕等に、あの子供を遺したんです。…遺してくれたんです…」
カワセミは窪んだ瞳を一杯に開いて、ナーガを見つめた。
「キミは、シンリィの後ろに、何が見えている……?」

随分時間が流れた気がする。
浜辺のシンリィが流木を抱え過ぎてガラガラ落とすまで、二人無言でじっとしていた。
カワセミが子供に歩み寄って、流木を抱え上げた。二人並んで杣屋まで歩いて、板壁に立て掛けられた流木にそれを重ねる。
ナーガは離れた所でそれを眺めていた。白い骨を思わせる色の抜けた木々は、重なり合って不思議なオブジェのようだ。
「明日…」
カワセミが背中を向けたまま言う。
「来られるか？　…朝…」
「えっ?!」
「来てくれ…」
ナーガが何を聞く暇もなく、カワセミはシンリィの肩を抱いて小屋に入ってしまった。
何が何だか分からないままナーガは従う事にした。
自分に出来る事は限られている。
本当の本当に、微々たる事だ。
＊＊＊
朝……、風が止まっていた。いわゆる朝まづめだ。
「……??」
いつも浜辺をほっつき歩いているシンリィがいない？　霧の中、胸騒ぎを抑えながら、ナーガは浜に降りた。
小屋の前の浜昼顔の群落の中に、うずくまる影がある。
「シンリィ?!」
ナーガは下馬してゆっくり近寄り……息が止まった！
砂の上に座り込んだ子供の背中に、昨日までカワセミの背にあった薄緋色の羽根が……あった！
子供は小さい体に羽根が大き過ぎて、立ちあがれなくてもがいているのだ。
「な…なんで?!　なんてコトを?!」
「……もう近寄ってもいいよ…」
不意な声に、ナーガはそちらを向いた。
小屋の茅の御簾がたくし上げられ、中のベッドに腰掛ける、羽根の前の持ち主が見えた。
「『羽根を渡す』…　話には聞いていたけれど、やってみれば、出来るモンだな…」
薄暗がりで表情が分からないが、今までと打って変わって、穏やかに力の抜けた声だった。
「ユユの羽根は悪魔を退けてくれた」
「えっ?!」

ナーガは小屋の中とうずくまる子供を交互に見ながら、おずおずと歩を進めた。
「シン…リィ…?」
シンリィは砂の上をいざりながら、こちらを見上げた。初めて間近で見る、はなだ色の大きな瞳。羽根の為、上半身の衣服がはだけているが、確かに胸や腹の黒い斑点は、跡形もなく消えている。
ホントに?…本当に、この子供は救われたのか?!

「シンリィ!!」
ナーガは思わず子供を抱きすくめた。
ずっと触れたかった、小さな小さな暖かさ!!
その様子を、小屋の中のヒトは静かに見つめていた。
「キミに……預ける」
カワセミは静かに言った。
「えっ??」
「里ではなくて『キミに』預ける。キミが、この子の存在に、何かを感じてくれているのなら」
「えっ、でも、貴方は?」
「…そうだな…」
カワセミは他人事のように軽く言った。

「これから、考える」
「でっでも、シンリィは、貴方がいないと」
「…うん……」
カワセミは相変わらず上の空な感じだ。
「ボクはシンリィと離れたりはしないよ。ずっと一緒だって約束したもんな。今までも、これからも…」

何だか変だ?
「カワセミ長……?」
「…ああ」
カワセミは我に返った感じでナーガに向いた。
「まず、シンリィを里へ連れて行ってくれ。どのみちキミの馬一頭しかいないんだから」
道理だ。筋道は通っている。
「居なくなったりしないで下さいよ」
ナーガはカワセミの気持ちが変わらない内にと、シンリィを抱えて馬に押し上げた。子供はちょっと不安な顔をしたが、小屋の中の『信頼するヒト』が阻止せずじっと見ているので、されるままでいた。
「シンリィを降ろしたら、すぐ取って返して来ます。だから、そこに居て下さいね!!」

「…うん……」
薄暗がりの妖精は、腰掛けたまま小さく手を降った。
そうして、二人を乗せた草の馬が上空の霧の中に溶けてから、……パタリと横に倒れた。

浜を飛び立ったナーガは、里へ向かうジェット気流を探した。前に乗せた子供は、マントを頭からすっぽり被せられている。高さに怯えないようにだが、シンリィは意外な程大人しくしていた。
力を抜きすぎて馬の首の方へずりそうになる子供を引き寄せて、腕に何か触った。
「…？」
シンリィの首に掛けられた石の首飾り。
「ユーフィの…ピンクの石…」
カワセミが持たせたのだろう。ナーガはそれを指で摘まんでみた。
「あれ？」
ピンクの石の隣に、新たな石が繋がれていた。半透明の細長い石…。カワセミが手首に巻いていた物だ。これで、いつもユーフィと繋がっていた筈。
「なんで？」
急激な違和感。
何で、通信用の護り石を、両方とも持たせるんだ？
……そうだ…、羽根が黒斑を退けるって分かっていたのなら、ユーフィは何で最初からシンリィの羽根になろうとしなかったんだ?!

「う～～・・だるぅ・・・…」
カワセミはベッドで丸くなった。
小さい頃から熱に浮かされるのには慣れていたけれど…。
「さすがに…、こんだけの…高熱は…初体験…か…も…」
ようよう上げた両手には、黒い斑点がどんどん広がっていた。
七年前…、赤子のシンリィの命を繋ぎとめた時点で羽根を無くしたカワセミは、この浜に辿り着くまでに、黒死病に侵されてしまっていた。ユユのくれた羽根は、その悪魔を眠らせていただけ。
今、羽根を手放した事で、悪魔は急激に目を覚ましたのだ。
「ユユに……逢いたい…なぁ……」
水色の妖精は、こわばった手を懐に入れて、ボロボロな布切れを取り出した。古すぎて元の色すら留めていないけれど、辛うじて花の刺繍があるのは判る。
「…ああ……、キミにも…逢える…かな……」

暫く見つめていたその布が手から滑り落ちて、地べたに着いた瞬間、ぼうと火が着いた。

＊＊＊

シンリィをしっかり懐に抱いて急降下して来たナーガは、海辺の杣屋を見て全身の毛穴が開いた。

干からびた小屋は、積み上げられた流木と共に、蒼い炎に包まれていた。

「カ、カ…カワセミ長――!!!!」

地面に着くのももどかしく、子供を抱えたまま飛び降りるのと、小屋の屋根が焼け落ちて積み上げた流木に埋まるのと同時だった。

「風…!!、風よ――!!」

ナーガの呼んだ風が砂を巻き上げ、小屋を覆ったが、白熱した炎が勝った。

尋常な炎じゃない。明らかに強い術のかかった炎。

「アア――――アア―!!」

マントを抜け出したシンリィが叫んで、小屋に向けて走り出した。

「見るな―!!」

ナーガが再びマントで子供を覆って倒れ込む。その間に流木は瞬時に燃え上がって、そして、波が引くように治まった。後には、この世の果てみたいな、白い残骸の山。

駆け寄ったナーガの前を、浜から海へ激しい突風が吹き抜けた。残骸は一瞬で風に砕かれて細かい灰となり、大空に散る。

風が去った後には、焼け焦げた砂があるばかりだった……。

浜昼顔の花は、何事もなかったように、残り風に揺れている。

シンリィが絡んだマントからようやく抜け出し、小首を傾げた。その小さな子供をナーガはしっかり抱き寄せた。

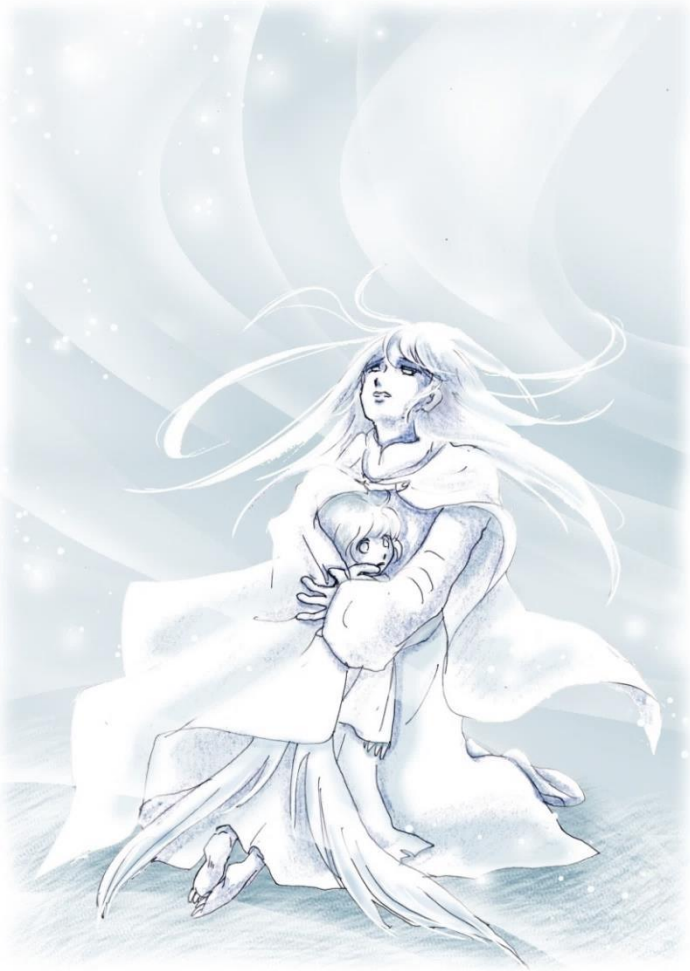
「分かっていたんだ。…そうだよ…、あのヒトは予言者だったもの……」

ナーガは子供をぎゅっと抱きながら呟く。

「自分の子供と……自分の荼毘(だび)の為の祭壇を積み上げていたんだ……」

白い灰は風に乗って灰色の海に散々(ちぢ)に舞う。

……海に降る雪みたいに……。



～エピローグ～

蒼の里の静か過ぎる朝。

「シンリィ！　シンリィ――！」

人気のない集落の外れを、ナーガは子供を呼びながら歩いていた。朝起きたら、シンリィがいなかった。珍しい事ではない。

「また、あそこだ…」

雨の朝も霜の朝も、シンリィは里の奥の、地べたが焼け焦げた円の中に座り込んでいた。

昔、カワセミとユーフィが住んでいたパオのあった場所。教えられもしないのに、シンリィは気が付くとそこに行って、座り込んで目を閉じて、大きく息を吸ったり吐いたりしていた。

「…分かるのかい？　君はここで生まれたんだよ」

ナーガは苦い記憶を噛みながら、そこからシンリィを抱き上げるのが常だった。

子供も少なくなってしまった里で、羽根を背負ったシンリィはそれでなくとも目立つ筈だが、大人達はあまり関わろうとしなかった。罪の意識が咎めるのかもしれない。

「フィフィ母さんが生きてればまだよかったんだけれど」

一応ノスリ家の独身の末娘が母親代わりを引き受けてくれたが、言葉が通じず感情も乏しいこの子供を扱いあぐねていた。

ノスリはシンリィを勿論大切に思っているが、彼も『負い目』という壁が邪魔をして、上手く付き合えずにいた。そうでなければ、子供の扱いは一番長けている筈なんだが。

ナーガが教えようとする『言葉』に、シンリィはまったく関心を示さなかった。名前を呼ばれた時すら反応せず、悪魔に心を持って行かれているのでは？…と、口さがなく囁く者もいた。

「シンリィ、今日も、僕と行くかい？」

馬に乗せる素振りをすると、子供は腕にしがみ付いて来た。里に馴染まないシンリィを独りに出来なくて、ナーガはずっと仕事先に連れ回していた。

もっとも、シンリィが懐いて付いて来たがっている訳ではない。その証拠に、馬に乗せて貰って飛び立つ時はそれなりに機嫌が良いのだが、目的地に到着すると、あから様なガッカリ顔になる。空飛ぶ馬で飛べば、いつか、あのヒトのいる浜に戻して貰えると思っているのだろう。その度にナーガはシンリィの頭を抱えて、ごめんな…、と謝るのだった。

自分は本当にシンリィを幸せにする事が出来るんだろうか？カワセミ長が命掛けて託してくれたのに…。最近のナーガは、そんな焦燥感に襲われていた。

「……??」
いつもの丸い焼け焦げの跡地に、シンリィの姿はなかった。ここ以外の何処へ行くっていうんだ？　不意に悪い予感が頭をよぎる。まさか浜辺を求めて里を出たのか？
放牧地の方から子供が歩いて来たが、シンリィより小さい女の子だった。
「シンリィ知らないか？　羽根のある、男の子」
女の子は右手に持った金鈴花で放牧地を指した。
「あっちへ行ったよ。男のヒトが手を引いてた。子供みたいに薄色な髪の、知らないヒト」
背筋がゾッとした。僕が幸せに出来ないと見て取って、この世ならざる所から、連れに来たのか?!
放牧地の土手を駆け上がって見下ろすと、心配は払拭された。黄色い花の絨毯の中に、シンリィの後ろ姿があった。
二人の大人が両側から手を繋いで、羽根の子供を支えている。当然だが…、カワセミではなかった。
胸を撫で下ろしながらも、ナーガは首をかしげた。逆光でよく見えないが、里の誰が、あの子を構っているのだろう?
次の瞬間、ナーガは息が止まった。片方の大人を見上げたシンリィの横顔が…、笑っているのだ!!。二人の大人を交互に見上げて、楽しそうに！
「シン…リィ…?」
ナーガは土手を下って茫然と声を掛けた。子供と、二人の大人も振り向いた。
「……!!」
あまりに意外な顔に仰天した。頭に赤いスカーフを巻いた、茶色の瞳の青年。青銀の長い髪を二つに束ねた、灰色の瞳の青年。二人とも肌は砂漠の民の飴色だ。
「シド!!　ソラ!!」
「お久し振りです、ナナ…じゃなくて、ナーガ様」
「今朝早く着いたんです。まだ皆寝ているだろうから、花畑でも見ながら時間を潰そうかと。この時期なら金鈴花が盛りだと思って」
砂漠の国…、西風の里の厩番の少年二人は、大長に才能を見出だされ、蒼の里で数年間修行して、立派な若者となって帰って行った。何年振りだろう?　災渦が来る前だから、随分振りになる。
それより……。
「シンリィを…」
「ああ、この子が案内してくれていたんです。もしかして、ナ

ーガ様の子供ですか？　可愛い子ですね、優しくて」
「優しい？」
「ええ、優しくて、懐っこくて」
「……」
「僕達、友達になりました」
二人は繋いだままの手を高く上げた。子供は黄色い花びらを散らせて、裸足の足を振り上げて白い歯を見せた。
「そう…か……」
この二人は、ヒトと言わず動物と言わず、ナチュラルに心を通じ合わせる事が出来る。
ややこしい責任や義務感なんか必要ない。ただ『愛する』だけでよかったんだ。
だってこの子は『愛しか知らずに育った』んだから……。

「シンリィ」
ナーガは屈んで、子供と目の高さを合わせた。
「笑っていたね。素敵な友達が出来て嬉しかったの？」
頬に掌を当てると、彼の高揚した上気(じょうき)が、伝わった。そして初めてこの子供が、妹と同じ片えくぼを持っている事を知る。
「僕達に会う前から、ニコニコしていましたよ」
「え？」
大人が気付かない些細な事で、この子を笑顔に出来る事があったのだろうか？

「僕達、モエギ様の命で来たんです」
土手を登る三人の真ん中で、シンリィは両手を支えられて、一生懸命ちょこちょこ歩いている。
「蒼の里が人数減って大変だろうから、手伝いに行けって」
「西風の里は蒼の大長様のお陰で殆ど被害を受けなかったんです。だから、今度は僕達がここへ来る番だって」
「そうか……、モエギ殿が……そうか……」
ナーガは色んな想いがいっぺんに押し寄せて来て、胸がはち切れそうだった。

幸せにするんじゃない。一緒に幸せになるんだ。
立ち止まっている暇はない。若い命はどんどん生まれて成長している。昨日は無かった希望が、明日には何処かで生まれている筈なんだ。

～おしまい～

～おまけ～

……

……

……

……

意識がゆっくり呼び戻されて、記憶が断片的に浮かんで来た。頭イタイ……そんなのからは、もう解放されると思っていたのに…、そういうモンでもないのかなぁ……。

「カワセミ…、カワセミ…、聞こえますか…？」

うっすら開けた目には群青色の長い髪が見えた。やっぱりこの髪はこのヒトの方がしっくり来るなぁ…。

「…大…長……？」

「ああ、良かった、目が覚めた」

「何で大長が先に来るのぉ？　まずユユに逢いたかったのに」

「……」

大長の後ろにいたヒトが、彼を押し退けて、ズイと前に出た。

「ユユ…!!」

水色の妖精が何か言う前に、そのヒトの平手が飛んだ。一発目でそのヒトがユユじゃない事に気が付いて、二発目でどうやら自分に痛みを感じる肉体がある事に気が付いて、三発目でそのヒトが泣いているのに気が付いて、四発目は大長が止めた。

「そんなに思いっきり殴ったら、今度こそ昇天しちゃいますよ。折角、三途の川から折り返して来たのに」

「だって、だって、なんて、愚かなの!!　黒死病を患った位で簡単に諦めてしまうなんて!!」

「…蒼の……狼さん……」

口の中に血の味がした。生きてる……。

視界が戻ると、そこは見覚えのある氷の天井だった。風出流山(かぜいずるやま)の神殿？

カワセミは思わずベッドから這い出そうとした…が、力が入らない。

「……ダメ…だ…。ここにいちゃ…」

風出流山は世界中の風の発信地だ。黒死病の患者がいて良い場所じゃない。だからユユも母親に助けを求めに行かなかった。

「無理しないで下さい。あちらの世界へ片足突っ込んで、二ヶ月も意識不明だったんですから」

大長がカワセミを抱きかかえて枕に戻す。

「…ダメ…、ボクから離れて…」

「大丈夫ですよ。自分の手を見てごらんなさい」
カワセミは手の平と甲を交互に見た。真っ黒だった両手は、カサカサだけれど、悪魔の斑点は跡形もない。
「……？？…どういうコト？」
「さあ、分かりません」
「……？？」
「分かりませんが、回復したんです」
「……？？？」
「私が不覚にも黒死病を貰ってしまってから完全に回復するまで五年もかかったのに、貴方ったら二ヶ月足らずで回復してしまうんですもの。全く、普段の虚弱体質はフェイクですか？」

大長は五年前、西風の里から戻る途中、やはり黒死病に取り付かれてしまっていた。
風出流山のふもとの氷温の氷室に結界を張って籠(こも)り、悪魔が諦めて去るのをじっと待っていたという。
「他のヒトにはお勧めしませんね。一か八かでしたから」
ようやく大丈夫と確信が持てたのは最近。しかし大長は、里へ戻るのを何となく躊躇(ためら)った。
「蒼の里はようよう『大長がいない覚悟』が着いていたんです。ノスリは立派に一人長を務めているし、弟子達も一皮剥けて一人前に近付いている。何よりナーガの術の力の伸び方が凄い。そこへ帰るのは、なんだか勿体ない気がしましてねぇ…」
で、隠れてウロチョロしている間に、ナーガが海辺のカワセミを見付け、アタフタしている間に、カワセミの杣屋に火が着いた。
「火の中から貴方を引っ張り出して、山の氷室に運んだんですが…、まあ、今だから言いますが、私の役目は看取る事だけかも…、と思っていました。殆ど虫の息でした」
口端の血を拭ってくれる大長の手の甲は、火傷で引きつれていた。

一度はあちらの住人になりかけたカワセミが、どうした事か、ある日を境にメキメキ回復して行った。そう、まるで……。
大長は懐かしそうに目をしばたいた。
「昔一度、産屋で貴方が息を吹き返した事があったでしょう？あんな感じで、何かの作用が働いて、貴方の呼吸が一息毎に、『生命のはじまりの力』をどんどん吸収しているようでした」
悪魔が去ったと確信してから、山の神殿にカワセミを運んだ。実は大長もここで、悠々自適の居候を決め込んでいた。
「知っていますか？　いっぺん悪魔を克服した者はね、もう悪魔を寄せ付けないんですよ」

「ええ…」
「貴方の子供はその役目を担って生まれて来たのかもしれないですね」
「……？」
「里に、悪魔に負けない強い力をもたらす為に」
「……!!…」
「あの子はナーガ・ラクシャが連れて行きました。私が貴方を助け出したのは知りません」
「……」
「会いに行きますか？　大丈夫だよって安心させてあげますか？」
「……」
　カワセミは考え込んでからポツリと呟いた。
「いえ、その必要、ないです」
「そうですか？」
「多分、シンリィは、ボクが死んでいないのを知っている」
「…ほお…」
「そして、ボクが与える以外のモノをシンリィが得る為には…、ボクがいちゃダメな気がします」
「そうですね」
　大長は髪を掻き上げて顔を上げた。
「私もそうです」
「え？」
「蒼の里は、新しい里へと生まれ変わろうとしています。私がいない事によって」
「……」
「要するに、ちょっと自由に、遊びたいんでしょ！」
　蒼の狼が、湯気の立つ粥を盆に乗せて現れた。
「それを言っちゃあ実も蓋もないでしょう」
　言い訳を指摘された子供みたいな顔の大長に狼は苦笑いして、カワセミの前に盆を置いた。
　兄もいっぺん死にかけたんだ。死んだと思って吹っ切れて、ここいらで荷物を下ろしてハジケてもいいんじゃないか？　と思う。自分の分まで里を背負って、ずっと長稼業をやって来たのだもの。
「楽隠居ってのもいいかもしれませんね。この神殿から見る月は実に綺麗だ」
「はぁ…本気なんですか？」
　カワセミは、今までにない力の抜けた顔の大長を、寄り目で見つめながら言った。
「貴方も一緒にどうです？」

「はあぁ?」
「ちょっと寂しいなと思っていたんです。愛想のない妹と二人きりじゃ」
「……」
そこでやっとカワセミは気付いた。
二度目の連れ合いと娘を亡くしてしまった妹を、独りにさせまいとするこのヒトの気持ちに。
「ボクは遠慮しときます。まだそんなに老け込んでいない」
「おやおや」
「あ……」
「どうしました?」
「そう言えば…、ボク、夢があったんです」
「どんな?」
「オタネ婆さんみたいな、偏屈で意地悪な爺さんになる事です」
「おお、それは素晴らしい!」
大長はニンマリ微笑んで、カワセミもつられて笑って、蒼の狼は無言で粥をベシャリと継ぎ足した。

何日か後…風出流山を旅立つ水色の妖精の闘牙の馬があった。
里へは向かわない。自分のやり方で、離れた所からシンリィを見守るつもりだ。

「思えば、ボクはずっと羽根に護られて生きて来た。別の見方をすれば、『羽根に生かされて』来たんだ」
これからの生き方は自分で決める。それが今まで自分を育み護って来てくれた者達への答えだ。

〜おしまい〜

二〇一〇・二・一〇